



西千葉キャンパス

西千葉移転を
記念し、昭和
41年、同窓会
で建立



西千葉キャンパス正門



第117号

創立140周年特別号

2012年10月15日発行

千葉大学教育学部
同窓会

〒263-8522

千葉市稲毛区弥生町1-33

創立百四十周年を迎えて

千葉大学教育学部長 瀧澤 文雄



昨年度は、震災関連でいろいろな問題が生じましたが、今年は、入学式も無事に開催でき、これまで大きな問題もなく、例年どおり学生たちは過ごしております。同窓会の皆様には、常日頃から様々なご支援・ご協力をいただき、心より感謝申し上げます。

昨年度末、千葉大学の教育担当理事である長澤先生(我が学部卒業生)から、教育学部のルーツは、師範学校より前の印旛官立共立学舎開設(明治五年九月)にあり、千葉大学の中で最も歴史のある学部で、本年度は教育学部創立百四十周年だとの指摘がありました。

そこで、このことについて、山中齊同窓会長と相談し、同窓会と教育学部との共同企画として、記念行事を開催することになりました。開催日は十一月十八日(日)ですが、学生も積極的に参加できるような企画になる予定です。今回の記念行事を足がかりに、百五十周年に向けた準備を積み重ねたいと考えております。その折は、寄付金をお願いをするようになるかも知れませんが、ご協力

いただければ幸いです。なお、現在は、「師道」という大きな石碑が一号館の前に設置されていますが、皆様方のご寄付によって、同窓会の記念会館ができないかと、夢のようなことを考えています。

今年になって、大学・学部の再編・統合の問題が、また動き始めています。教育学部もその独自性と必要性について明確な説明が求められています。財政的に困難な状況が続き、社会の動向も先を見通せない状態ですが、時代に左右されることなく、教育に関する研究を深め、その成果としてより多くの優れた教員を世に送り出すことが、変わることにない教育学部の使命だと考えています。

教員を取り巻く環境は、相変わらず厳しい状況ですが、教員という職業の素晴らしさを伝えることで、より多くの学生が教員を目指すようになってほしいと思っています。百四十周年を機に、在学生をはじめ卒業生が、さらに新たな千葉大学教育学部の歴史を築いていくことを、心より願っています。

これからもご支援とご協力の程、よろしくお願いいたします。

教育学部百四十周年を迎えて

千葉大学教育学部同窓会会長 山中 齊 (55・3卒 市原市)



八月の旧盆の三日間、NHKBBS放送で映画「人間の条件」が放映されました。

作品はモノクロで、内容は暗くて重いものでしたが、三日間続けてテレビの前に釘付けになりました。

五味川純平氏によるこの映画の原作は、私が千葉大学在学中に出版されたものです。暗い木造校舎内で、仲間たちとこの本を読み、さらに映画化された作品を見て、これが生きていく上での人間の条件だとすれば、我々はいったいどう生きたいのかを、学生らしく真剣に話し合ったことを懐かしく思い出しました。今にして思えば、五十年前のこの頃、私は教育学部に同窓会があるというなど全く知りませんでした。

その私が、八月二十五日に開催された教育学部創立百四十周年に当たる「第六十回同窓会定期総会」で、三度会長に選任されました。内心忸怩たるものがありますが、従来にも増して身の引き締まる思いで引き受けさせていただきました。

私はこの四年間、同窓会創設の目的である「会員の互助親睦に努め、

もって母校の発展に寄与する」ため、

役員と力を合わせて努力してまいりました。とりわけ、組織の活性化、そのための広報活動に力を注ぎました。年二回発行している「同窓会報」

や各支部宛に送付している「本部だより」は、本会活動の大きな力になっています。

母校の発展のためには、大学当局との連携が欠かせません。事務局が学内に設置された三年前から連携は更に強化されてきています。

会員の皆様の協力、役員の献身的な努力、大学当局の支援等々により、同窓会活動は一步一歩前進しつつあると自負しています。更なる会の発展のため、皆さんのなお一層のご指導・ご協力をお願い申し上げます。

さて、昭和五十五年一月に発刊された「千葉大学三十年史」は、教育学部の沿革について、あらまし次のように述べています。

『明治五年（一八七二年）発布された「学制」においては、師範学校の整備が、当今にあつて極めて重要なものであることが述べられている。この「学制」に基づき、明治五年九月二十三日、印旛官立共立学舎が開設さ

れた。この学校は、印旛県下において「学制」を実施する端緒をなすもので、小学校のモデルでもあり、小学校教員になるうとする人たちに、教授方法を習得させることを目的としていた。これが、千葉県域における小学校教員養成の始まりであり、本学部の発端といふことができる。』と。

れた。

我が国で「学制」が発布されたその年に、本県内では、小学校教員の養成が始まっていたのです。江戸時代から明治へと移り変わる、まさに我が国の歴史の大転換期に、国を挙げて教育の整備に着手したことは特筆すべきものです。

その明治五年から数えて、平成二十四年（二〇一二年）は、ちょうど百四十年目に当たることになります。ご承知のとおり、現在、千葉大学は九つの学部（教育・文・理・法経・医・薬・看護・工・園芸）によって構成される首都圏でも屈指の総合大学です。その九学部の中で最も古い歴史を有するのが教育学部です。百四十年の歴史、そして、世に送り出した卒業生四万余名の重み、このことは他に類を見ないものです。

記念すべき百四十年に当たる本年、すべての関係者でもう一度、この教育学部の持つ歴史と伝統の意味を問い直してみ、やがて迎える百五十年に向けてのステップの年にしようという機運が、昨春秋以降、俄に盛り上がりつつありました。それを受けて、同窓会と学部とで何度も打ち合わせを重ね、この十一月十八日（日）に「教育学部創立百四十周年」を記念しての事業を実施することといたしました。

準備期間も予算的な措置も十分とは言えませんが、教育学部の持つ歴史と伝統を改めて皆さんで再確認し合うことによって、教育学部、そして、同窓会の更なる発展に資したいということです。

すべての関係者の皆さん、どうぞ本事業へのご協力・ご支援をいただきますようお願いいたします。

記念事業への参加のご案内

・日時 平成4年1月8日（日）午後1時～

・会場 教育学部大講義室

第一部 記念式典

主催者挨拶・来賓祝辞

プレゼンテーション（学部の現況

第二部 シンポジウム

「今求められている教師像」

・祝賀会 参加費二〇〇〇円

・問い合わせ等は、火曜日の午前中に同窓会事務局へ

電話・FAX

〇四三（二九〇）二五九六

弥生の丘に育てられて



千葉大学教授
上杉 賢士
(S7・3卒)

教育学部を卒業して、船橋市内の小学校で初めて教壇に立った。その後、附属小学校の八年間を経て、平成十一年から縁あって母校の教壇に立つことになった。

小学校現場で教頭を含む十六年、教育行政で計十一年半、今年度末には大学教員としての仕事が一十三年半になるので、教職生活は、通算四十二年を数える。その間、いろいろな立場で教育に携わってきたので、いささか人の役に立ったかなと思っている。

しかし、とこのごろよく思う。私は、学部生から始まる通算二十五年余りをこの西千葉キャンパスで過ごした。加えて、第二人も教育学部で学んだ。人の役に立ったなどということはいかにもおこがましくて、実はこの弥生の丘で丸ごと育てられたのだと。

教育学部創立百周年の節目の卒業生だったということは、その後知った。当時は、月二万円で暮らすことが可能だった。アパート代は、一畳千円というのが相場だった。授業

料に至っては、月額千円、年額一括払いでも一万二千元でしかなかった。大学職員になって、この四十年の間の大学と学生生活をめぐる状況が極めて厳しくなったことを実感している。

なお、この欄に原稿を寄せている笹本さんは、附属小学校時代の教え子、今井さんは、私の授業を受講した学生である。大学をめぐる厳しい状況のなかで、若い世代が着実に育っていることもまた実感する。

創立百四十周年にあたって

—教育学部と私—



笹本 博紀
(H4・3卒
千葉大富台小)

一号館前で何度も目にしていた言葉。恥ずかしながら、この原稿を書いている今、初めて気づいた。日々の「指導」は「師道」の修練の場であることに。私には師道は極められないだろうが、私が師道を歩むときに、教育学部は常に力強く手を貸してくれた。これが百四十年の歴史と伝統の力なのだと思う。

私は、教育学部を卒業後、東日本大震災で被災した旭市の小学校に着任した。十数年後、夜間開講の大学院に、ずうずうしくも四年間お世話になった。附属小・附属中でもお世

話になっているので、通算十七年にわたったの教育学部在籍となる。

その在籍期間の中での素晴らしい出会いやつながりが、現在の私を支えてくれている。同じ学舎で教職を目指し、現在、学校現場で働く同僚はもろろんのこと、学部の先輩方や附属小・附属中時代お世話になった先生方には、校内研修の講師として、また、研修その他様々な場でも温かく声を掛けていただいている。そして、学部・院生時代の先生方からは、大学で学んだことと日々の実践の関連を常に深く考えよと、ご指導をいただいた。

また、学生ボランティアに助けられたり、現在も教育学部の芸術学研究室と連携し、美術館での鑑賞授業を行う準備を進めたりもしている。

まだまだ道半ばではあるが、これからも皆様の力をお借りしながら、師道を歩んでいきたいと思っている。

希望



今井 咲
(H4・4入学
船橋市)

八月に入り、大学生活初めての夏休みを迎えた。入学してから四カ月が経ち、大学生活にも慣れてきた。長い歴史と伝統のある千葉大学教育

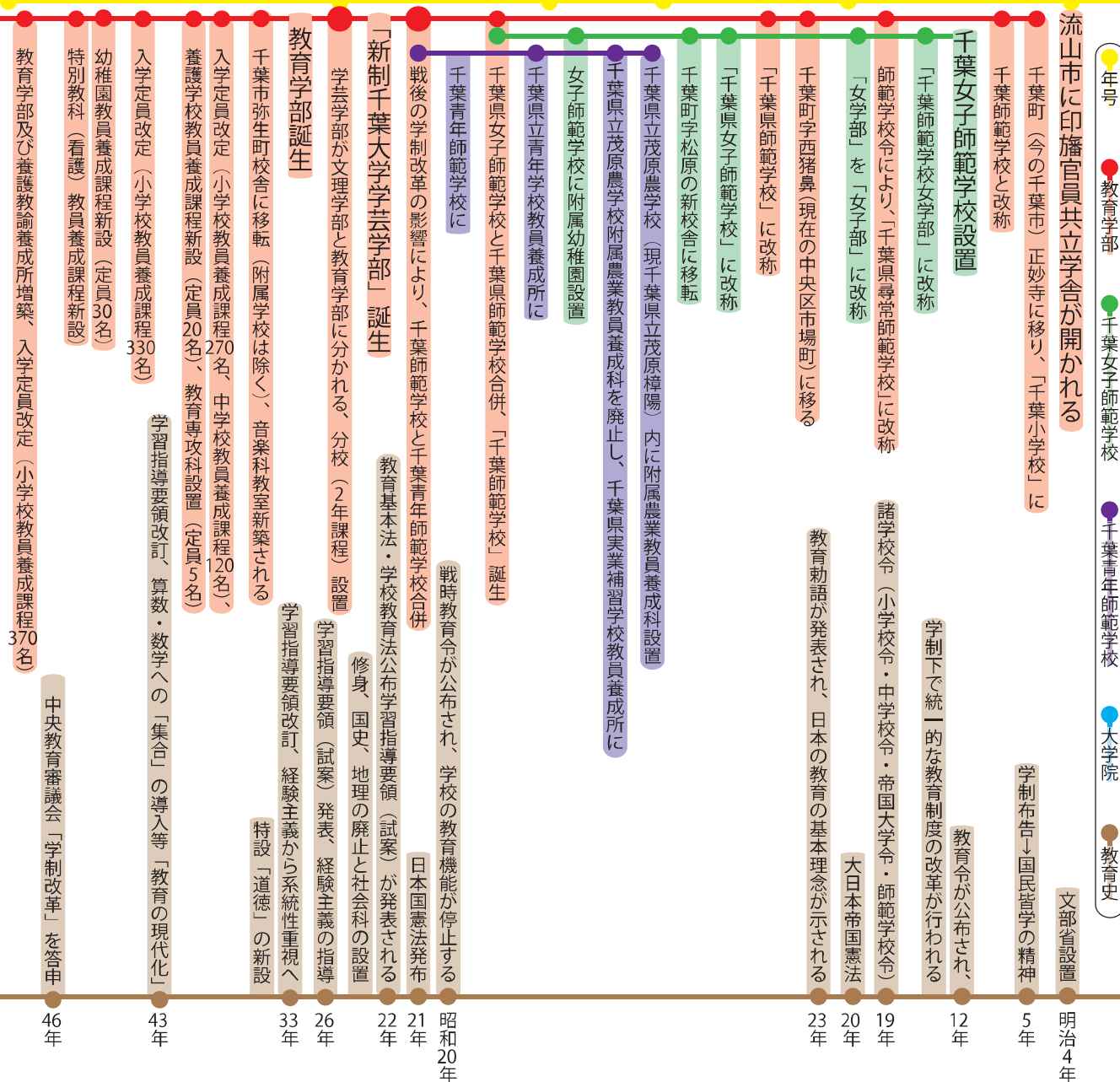
学部だが、その創立百四十周年という節目の年に入学できたことを大変嬉しく思う。そして、先輩方によって受け継がれてきた歴史と伝統を絶やさぬよう、しっかりと学ばなければならぬという責任も感じている。

緑豊かで広大なキャンパスの中で学ぶ全国から集まった学生。教員採用率全国一位という素晴らしい実績。私は、そんな千葉大学教育学部に大きな希望を持って入学してきた。特に附属小・中学校と連携した実習や現職の先生方による講義など、充実した環境の中で学べることへの期待と喜びを感じている。また、同じ教員を志す仲間と交流し、語り合う時間はとても貴重な体験になると思う。

最近、生徒がいじめを苦に自殺するという痛ましい事件が続いている。教員になればいじめの問題に直面することになるだろう。まだ若く経験の浅い自分がこのような事態に直面した時、何ができるのかと不安になるが、千葉大学で学ぶ四年間という時間と様々な経験が、困難を乗り越える力を与えてくれると信じている。

今後、教員の大量採用時代が来ると言われている。私たちが、若い力で教育の現場に新しい風を吹かせる原動力となれるよう、四年間、大きな期待と希望を胸に、できることを精一杯やっていきたいと思う。

140周年



附属小学校

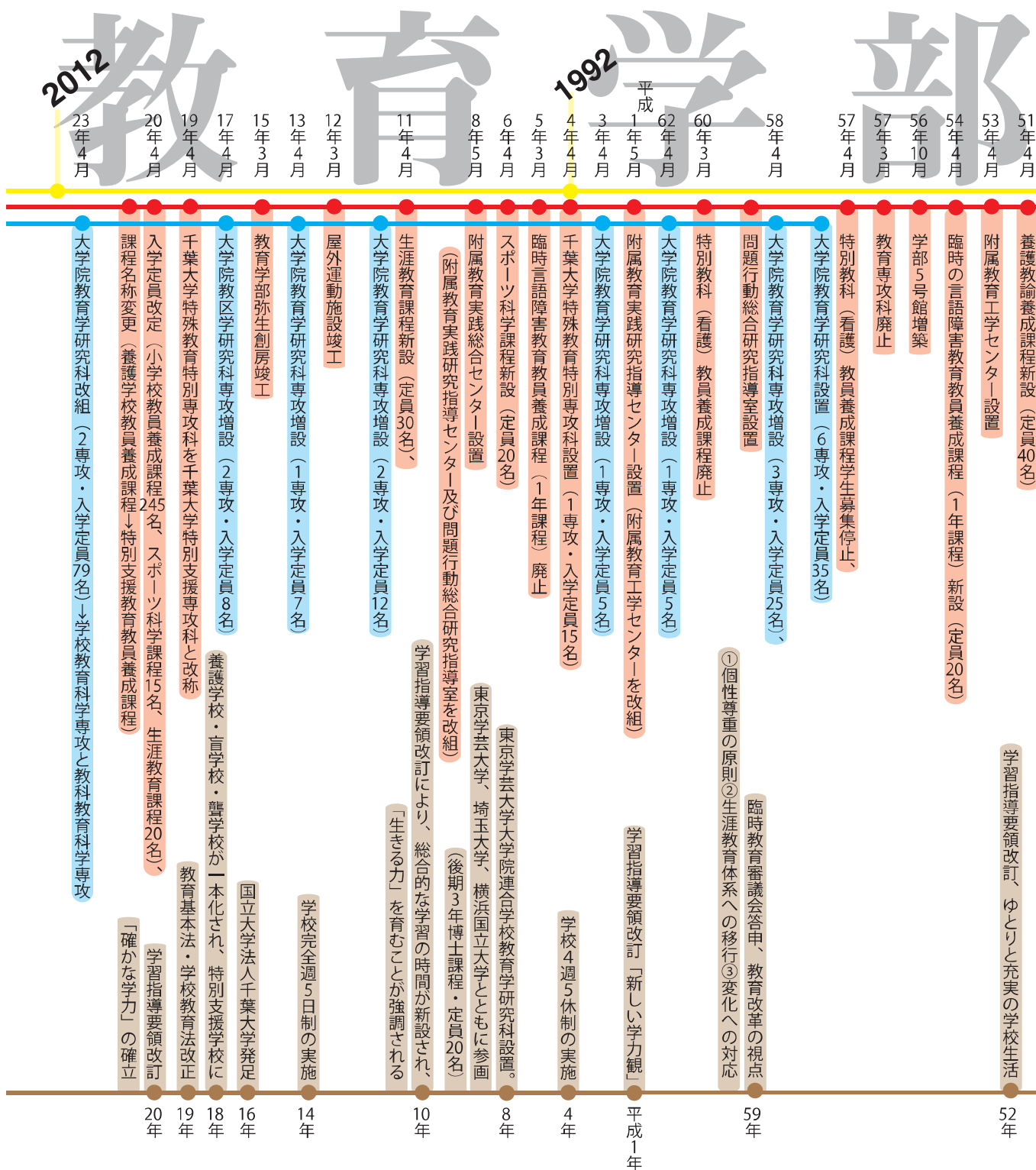
その源は今から140年前にあり、教育学部と同じく長い歴史を持ちます。1966(昭和41)年に、第一小、第二小を統合し、現在の教育学部附属小学校が発足しました。平成8年には統合30周年記念式典が開催されています。

明治6年	附属小学校設置
昭和16年4月	国民学校令の発布により、附属国民学校と改称
昭和22年4月	千葉師範学校男子部附属小学校及び女子部附属小学校と改称
昭和24年5月	千葉大学千葉師範学校第一附属小学校、第二附属小学校と改称
昭和26年4月	千葉大学教育学部附属第一小学校、附属第二小学校と改称
昭和41年4月	附属第一小学校と第二小学校を統合して千葉大学教育学部附属小学校に

附属中学校

昭和22年にその歴史は始まりました。1965(昭和40)年には第一、第二中を統合し、千葉大学教育学部附属中学校として現在の形になりました。平成17年には統合40周年記念式典を開催しました。

昭和22年4月	千葉師範学校男子部附属中学校、女子部附属中学校として発足
昭和24年5月	千葉大学千葉師範学校第一附属中学校、第二附属中学校と改称
昭和26年4月	千葉大学教育学部附属第一中学校、第二中学校と改称
昭和40年4月	附属第一中学校と第二中学校を統合して千葉大学教育学部附属中学校に



附属特別支援学校

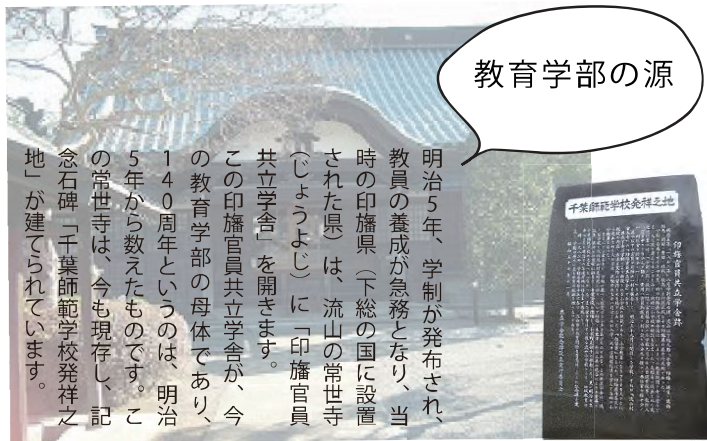
1965年、附属小学校に特殊学級が新しく設置されたことから歴史は始まりました。現在、教育学部1年は、必修の実習である「介護等体験」で必ず訪れています。

昭和40年4月	附属小学校に特殊学級（知的障害）新設
昭和45年4月	特殊学級学級増
昭和48年4月	小・中学校特殊学級、附属養護学校として独立
昭和49年4月	附属養護学校高等部新設
昭和57年6月	附属養護学校が千葉市稲毛区長沼原町に竣工、移転
平成18年	養護学校・盲学校・聾学校が一本化され特別支援学校に
平成19年4月	附属養護学校を附属特別支援学校と改称

附属幼稚園

その歴史は古く、平成15年には創立100周年となりました。

明治36年6月	千葉幼稚園として県教育会創立
大正5年	千葉県女子師範学校代用附属幼稚園となる
大正11年4月	県移管、千葉県女子師範学校附属幼稚園と改称
昭和18年4月	文部省移管、千葉師範学校附属幼稚園と改称
昭和26年4月	千葉大学教育学部附属幼稚園と改称
昭和58年6月	創立80周年記念式典開催
平成5年6月	創立90周年記念式典開催
平成6年4月	養護教諭設置
平成15年6月	創立100周年記念式典開催



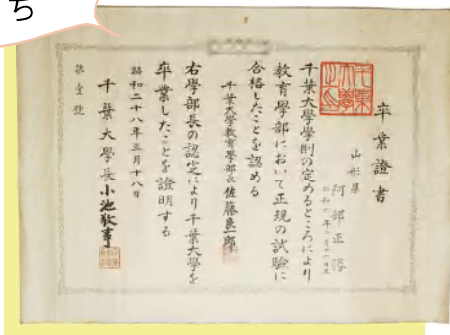
教育学部の源

明治5年、学制が發布され、教員の養成が急務となり、当時の印旛県（下総の国に設置された県）は、流山の常世寺（じょうよじ）に「印旛官員共立学舎」を開きます。この印旛官員共立学舎が、今の教育学部の母体であり、140周年というのは、明治5年から数えたものです。この常世寺は、今も現存し、記念石碑「千葉師範学校発祥之地」が建てられています。

教育学部の 今昔。

教育学部の学生が過ごす大学の環境は、大きく変わってきました。教育学部の源から、現役生の日常や現在の大学環境まで、その変化を紹介していきます。

教育学部の
昔を伝える
写真たち



教育学部第1号の卒業証書。



1897～
1962

千葉町字西亥鼻（現在の中央区市場町）にあった教育学部。

昔



西千葉に移転した当時の正門。

1965
頃



稲毛にあった文理学部。ここで一般教養を学んだ。

1963
頃

1968～



1963～



附属図書館 の変遷

教育学部の学生が学ぶ西千葉キャンパスにある附属図書館。その外観も、内装も、大きく変わってきました。

新しい学びのカタチ

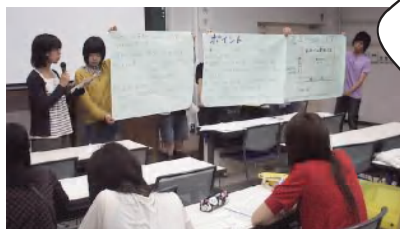
社会の変化に合わせた新しい内容の授業の開設がされたり、学生主体の活動が生まれたりしています。その一部を紹介します。

プロジェクトベースの学び

子どもにとつての「居場所」という空間において、他者と関わるという視点から子どもの理解を深めていく講義です。学生がフィールドワークなどに代表される質的調査のような社会学的手法を通して考察していくという、他の授業とは一線を画す特徴を持っています。



2011年度は千葉市立さつきが丘西小学校で、ランチルームを魅力的につくり変えるプロジェクトを行った。



担当：新谷周平准教授
(専門：教育社会学)

こんな授業受けてます



担当：藤川大祐教授 (専門：教育方法学、授業実践開発)

子どもの居場所論

新しい学びの空間

学生たちが学ぶ空間も変化しています。建物が改装されたり、新設されたり...多様なニーズに対応できる場づくりが着々と進められています。



教職サポートルーム

教職を目指す学生に対する教員採用試験のサポートや、学校現場に出て行くことへの不安を学生が相談できる場として利用されています。教員採用試験における筆記試験の傾向と対策を押さえることはもちろん、面接の練習をしたり、模擬授業を行ったりと、実践的なサポートも行っています。ここには、同窓会と学部が共同で委嘱した同窓会員が、進路指導員として常駐しています。このようにバックアップ体制が整っているのは千葉大学教育学部ならではのです。

WiCAN

千葉アートネットワーク・プロジェクト

教育学部神野真吾准教授の主宰するプロジェクト型の授業であると同時に、千葉市美術館のアウトリーチプログラムでもあるWiCANは、千葉の各所で活動を展開しています。工学部や法経学部など他学部の学生も参加しています。2010年度からは、アートの視点から学校をとらえ直して、より豊かな学校のあり方を考える「アートから始める学校プロジェクト」を展開しています。

キャリア教育

昨今、ネット上に台頭してきたSNS(ソーシャル・ネットワーク・サービス)を用いた授業感想や出席を取り、また、各グループが実際に現場で働く人々に取材に行き、ブログを制作して発表します。技術的にも、概念的にもかつてはなかった授業形態を持った講義です。

今



2012~

附属図書館(アカデミック・リンク)

2010年11月から増築工事を始め、2012年度から「アカデミック・リンク」のコンセプトの下、再オープンした千葉大学附属図書館本館は、テーマの異なる「L」「I」「N」「K」の四つの棟を有しています。中でも学生がよく利用するN棟は、「声を出す」ことを積極的に受け入れる「対話する図書館」です。誰と、どんな「対話」をしたいかによって、N棟の中でもスペースを選べます。新しくなった図書館では、資料を探したり、一人で熟考する学生の姿はもちろん、友達と課題に取り組んだり、大勢で議論したりする学生の姿も多く見られます。また、他学部の学生が議論している様子を目の当たりにするなど、互いに刺激し合える環境があります。

若手教員とともに



藤谷 誠
(58・3卒
市原 国分寺台東小)

団塊世代の大量退職時代を迎え、近年、千葉県の新規採用教員数は千人規模となっている。我が千葉大学の卒業生も数多く採用されており、有望な人材を新たな仲間として迎え入れることは、大変喜ばしいことである。

しかし、新規採用者が増えてきたということは、学校現場において、若手教員の育成が急務となっているということでもある。本校においても、十五名の学級担任のうち半数は二十歳代から三十歳代前半であり、若年化が進んでいる。

教員の成長が子供たちへの指導に直結すると考えれば、校内における若手教員の育成は、学校経営の一つの柱である。本校では、そのための取組として、まず、基本的な学習習慣と生活習慣のルールを学校全体で統一し、若手教員も同じ内容、同じ歩調で子供たちの指導に当たれるようサポートしている。ぶれのない指導は、安定し

た学級経営を可能にするものと考ええる。

次に、ベテラン教員を校内マイスターとし、若手教員の支援に当たっている。例えば、図画工作では、素材の選定、指導のポイントなど、経験豊富な教員のアドバイスを一つで授業が充実した内容に変身する。支援を通して、自信と確かな授業力をつけさせたい。

もう一つは、授業参観の奨励である。校内はもとより、市内外の研究会への参加を促している。特に、本市(市原市)が平成二十五年(高)一貫教育」に向け、各校で実施している小中間の相互参観に力を入れていく。自分たちが育てた子供たちが、やがて進学する中学校の授業を垣間見るとは、小中連携を見据えた指導を心掛ける一つの契機となっている。

こうした若手教員の育成は、同時にベテラン教員の力量や私たちが管理職の力量も高めることとなる。目の前にいる子供たちのため、若手教員とともに、学校も成長を続けたい。



校内研究で若手を育てる

―若手教員への期待―



阿部 真一
(53・3卒
習志野 藤崎小)

本校では、三十数年にわたり算数の研究に取り組んでいる。学習指導要領の核となる思考力・判断力・表現力を育むことを研究の目的とし、言語活動充実のために、式や図、言葉、表などを用いて考え、説明する活動を重視している。

本校の児童には、自分なりに考えを書き表したり、積極的に話したりする姿が見られる。話をしたがらなくなる高学年を見ても、生き生きと活動している。しかし、今、私たちが目指すものは、「伝え合う」から「学び合う」への質的な向上である。指導技術を高めるためにも、教材を通して児童にどのような力をつけたいのか、そこを明確にした取組が大切である。当然、単元の系統や数学的な考え方についての教材分析が重要となる。

若手教員が指導案を片手に相談

に来る。以前は、授業をどう流すかという内容が多かったが、最近では、「ここで働く数学的な考え方とは」「この教材の本質は」という質問が多い。このような質問には、私も熱が入る。教師のこの姿勢が学び合いの質を高め、子供の力を伸ばすと確信している。

私が、若手教員によく話すことは、指導案の作成、授業準備と同様に、事後の授業分析を大切にしようということである。その時間で何を学んだのか、教師のねらいに沿った学びが成立したのか、児童の内面にアプローチしたい。

そこで、児童に「学習感想」を書かせることを勧めている。「楽しかった。面白かった。」に終わることがないように感想を書く視点を指導する必要がある。ここから、子供の他者とかかわり、他者から何を取り入れたか、次にどうつながりたいのか等、子供の学びの様相を知る手がかりとなる。

若手教員が増加する中、各教科を担う人材を育てることも学校現場の課題である。校内研究を通して、若手・中堅の中から、将来の算数のエキスパートが一人でも多く輩出されることを願っている。

特別支援教育は 今



一場 真太郎

(S5・3卒

千葉市)

創立百四十周年を迎えた本学部に、昭和四十年四月、養護学校(現特別支援教育)教員養成課程が設置されて四十七年が経過した。卒業生には、既に定年退職し、第二の人生を歩んでいる方も多し。

この間、昭和五十四年の養護学校の義務制を経て、平成十九年四月から、特殊教育は特別支援教育として位置づけられ、すべての学校において実施されるようになった。対象も従来の障害に加えて、発達障害等(LD・ADHD・高機能自閉症・アスペルガー症候群等)も含めて、特別な教育的ニーズに応じた教育が実施されている。本年四月、和歌山県で特別支援教育のノウハウを、「通常学級で学ぶ軽度の障害児が学習内容の理解を深める手助けになる上、障害のない子供たちにも授業が分かりやすく等」の効果が期待できる」として、今年度から公立小中学校の通常学級に導入していくと

いう新聞記事を目にした。

私は、特別支援教育を通して、子供たちや先輩から多くのことを教えてもらった。

- ① 「これ・それ・あっち・そっち・むこう」等の指示代名詞により混乱している子には、具体的な名称や手がかりを提示する。
- ② 話は、子供の目線で、ゆっくり、はつきり、ジェスチャーを交えて。
- ③ 理解を深めるために、視覚化を。言葉とともに、絵カード、写真カード、文字カードの活用を。
- ④ 子供にとって「見やすい・聞きやすい」環境を作り、注意の集中を。
- ⑤ 「○○しない・○○はだめ・○○ではない」等の命令・禁止・否定・皮肉等の言葉は極力控える。できれば、その逆の言葉で生活を。
- ⑥ 「待つ」ことの大切さ。子供の返事、反応を確認してから次へ。特別支援教育に限らず、教員は多くのノウハウを蓄積している。それらの情報の交換・交流を身近なところから始めることを期待する。

学校現場へ



いっぽの力



尾崎 洋右

(S1・3卒

高校 市川市)

小・中・高校に勤務して定年退職後、中国で二年間日本語教師。帰国後、非常勤講師として九年余り勤めた大学もこの三月で定年になった。長い教職生活の中で心に残っていることを三点取り出してみる。

- ① 大学に勤め始めた頃、学生の授業評価の中に、身に覚えのない遅刻・早退があったかのように回答した者が二名いた。時には、こういう意外な評価もあるが、学習者による授業評価は、授業を振り返ってみる良い機会になる。授業は、学習者一人一人のためのものである。私は、しばしば学習者に授業の感想を書いてもらい、学習者の実態把握、授業改善に役立ててきた。
- ② 中国で日本語を教えたRさんが我が家に来た。その時、手土産に外郎二箱とクッキー一箱を持ってきた。外郎の一箱は誰か他の人

への土産なのかと思って聞くと、最初は一箱ずつのつもりだったが、日本人は偶数よりも奇数を大切にするといいことを思い出し、急遽、駅の売店でもう一箱買い求めたとのこと。国際化の現在、自国の文化をよく理解した上で、その知識を伝えることが求められる。

③ A中学校一年生の国語の最初の授業。国語学習の面白さを伝える大切な時間。学習材に数編の詩を選び、授業に臨んだ。その詩の中で、生徒は草野心平の「秋の夜の会話」がすごく気に入ったらしく、休憩時間に私に出会おうと、寒くもないのに詩の冒頭の言葉「さむいね」を連発し出した。そのうち、このことが他のクラスまで波及し、他学年の生徒まで私に会うと挨拶代わりに「さむいね」と言うようになった。そして二ヵ月後、私はA中を去ることに。別れの挨拶にこの詩をぜひ朗読してほしいというはめになった。おまけにA中を去った後も、A中の卒業式がすんだ真夜中、卒業生から電話が入り、この詩を今、ぜひ朗読してほしいと言われたのには本当にまいった。時に言葉は生きて働き、人の心を動かす。

中国語を学ぶ



石橋 富士夫

(S2・3卒
山武地方)

退職して十年目になる。今まで取り組んできたことはいろいろあるが、ここ数年は、中国語の学習に力を入れている。

中国の大学で日本語を教えていた教職の先輩の誘いで、何度か中国を訪問するうちに中国人の友人もできた。この折角の機会を逃す手はないと考えたこと、広い中国ではあるが、全国共通の標準中国語があることを知ったことなどが学習を始めるきっかけとなった。

NHKラジオ・テレビの中国語講座で、会話を中心に学び始めて今年で四年目を迎えている。自分の言いたいことが多少言えるようになり、聞き取りでも、中国語のニュースなどで分かる単語が増えてきている。努力すれば結果がついてくるようで励みになる。

中国語の表記は、ごくわずかなアルファベットを除き漢字である。漢字は簡体字であるが、日本語と同じもの、あるいは、よく似てい

るものも多い。文章を見れば内容が推測できるものもある。しかし、内容を正確に理解するには、文法の学習が欠かせない。

中国語会話の学習で発音は最も重要である。中国語の発音は「音」と「音の高さ」が組み合わされてできている。日本語の音と似ているものもあるが、日本語にない音も多い。繰り返し練習する以外に上達の方法はなさそうである。

日々の学習はNHKの講座のテキストを使っている。予習で次の内容をよく読み、発音表記で発音を確認し、文法を理解して、神経を集中させて放送を聞く。復習は、発音の練習と単語や文章を何回も読み書きして暗記することを重点に行う。言いたいことが無意識に口から出て来ないと、実際の会話には使えないと思うからだ。

年に二回くらいは中国に行く。中国語で話し掛け、返答があるときなど進歩を実感できる。中国の友人たちにも教えを請うが、最近では、発音は完璧だなどとお褒めをいただくこともある。お世辞半分としても正直嬉しい。また、学習意欲も倍増し、学ぶ楽しさや達成の喜びを感じている。

日々を気ままに



米本 弥榮子

(S6・3卒
旭市)

千葉大学を卒業して五十一年目、なんと半世紀である。三十八年間の教職生活は多忙だったが、思い出の多い充実したものだった。三人の子供に恵まれ、義父母との同居だったので、家族七人の賑やかな生活だった。しかし、子供たちは巣立ち、義父母を見送り、現在は夫と二人になってしまった。

夫は、写真撮影とバドミントン、母校(高校)の同窓会役員と趣味に生きて多忙であるが、私の方は、他人に自慢できるようなものがない。細々とNHK学園の短歌を続けているが、生来の性格の故か、短歌に対しての学習不足のためか、情感に溢れた感動を呼ぶような歌は詠めず、どうしても理屈っぽくなり、がっかりである。しかし、ここに学ぶ人たちは、大方が二十年以上続けており、八十歳を超えた方も多い。がっかりせずに頑張ろうと自分を励ましている。いずれにせよ、日常生活の中で

の驚きや感動、怒りを短歌という形に表そうとすることは、脳の活性化を図る大切な働きではないだろうか。

今一つは、絵を描くことである。これも自己流で描きたいと思ったときに描いている程度である。美しい物(取り立ての野菜や花など)や景色に出会った時には意欲が湧くが、なかなか思いどおりに描き出すことができず、ストレスが溜まるがやめられない。下手の横好きの一語に尽きると思うが、美しい物に反応する心を失わないことも老化を防ぐ大切なことと思っている。自分が描くだけでなく、素晴らしい絵画や美術品を鑑賞することも大好きである。

また、学生時代の山登りのご褒美であろうか、腰や膝の痛みもななく、ワングルのOBG会の紅葉山行に参加している。最年長ではあるが、まだまだ参加したいと思っている。そのために6kmを一時間で歩くよう心掛けウォーキングをしている。幸い特に大きな病気をせず、病院のお世話にならずに済んでいる。心を豊かに精神の充実に努め、身体機能の活性化を図り、一日一日、元気に過ごしたい。

ハワイアンから演劇活動まで



菅野 秀夫

(S9・3卒
西郷地方)

「早くなりたや千葉大の教育士
鞭をふりふり ちいばっぱ」

こちや理想は高いが ガキ大将
コチャエ コチャエ」

パロディ風の千葉大音頭。

「ちいばっぱ」はともかく、当時はハワイアンブーム。初任の安月給を貯めて購入したスチールギターを引っさげて、学芸会で颯爽とガキ大将ぶりを発揮しようとした。しかし、現実には厳しく、部活動の渦に取り込まれ、趣味の世界はしばらく休業と相成った。三十数年後、退職の時に至り、ようやく念願叶って、ハワイアン復活へと。

しかし、時の経過はむなしく、弦やスチール棒は錆だらけ。やむなく退職金を活用し、新しくスチールギター、アンプ、アメリカ製の付属品を揃え、ハワイアン再現となった。しかし、家内演奏では物足らず、フラダンスに着目し、PTAの知人の縁で、フラダンスの演奏を引き受け、各種発表会、

施設訪問などに同行の場ができ、楽しい日々が展開されたが、演奏の立場を忘れ、誘われるがままに、フラの踊りに入り、二百余名のご婦人の中で「白一点」。珍しさもあり、人気抜群だったが、これは不本意で、思案の折、別のPTAの方から、芝居の仲間はいかがと誘われ、フラとともに芝居にも足を踏み入れた。

我が老人クラブに演劇サークルを結成し、四年前、千葉県文化会館での県老人クラブ芸能大会の「忠臣蔵赤垣源蔵徳利の別れ」で旗揚げし、千葉テレビ賞受賞とさし先の良いスタート。昨年は、八千代市民会館で「名月赤城山」、今年は、市原市民会館で「弁天小僧菊之助」。芸能でも芝居は珍しく、評価はうなぎ登り。男女混成で、個々の特性を生かし、やる気が出てきたようである。これから出し物はどれにしようか、みんなて楽しみにしている。

千葉県下トップの加入率を誇る匝瑳市中央地区シニアクラブの会員千三百余名のガキ大将として、ますます生き生きと、ハワイアンと演劇活動に、楽しさ倍増。明日も夢見て前進あるのみ。

ききだより

四 国 路



野中 豊

(S7・3卒
藤子市)

この三月、四国に行った。

新幹線を福山駅で降り、観光バスで尾道市へ。尾道市から今治までは瀬戸内しまなみ海道、橋で繋がれた六島を縦断し、三つの吊り橋で来島海峡を渡ると、もう四国、今治である。

今治から一時間ほどで松山に着。四時にならないうちにホテルに入った。

早速、子規、漱石の愚陀仏庵に行こうとしたら、一昨年七月の豪雨で全壊してしまったという。

正岡子規記念館の四階に愚陀仏庵の原寸大のレプリカがあった。句会を開いた一階のみで、巧緻に造られてはいるが、やはり模型であった。

タクシーで種田山頭火の終の棲家「一草庵」に行く。日曜日で庵の中まで入れた。

山頭火が松山移住を決意したのは、昭和十四年、五十七歳の時であった。

「層雲」の俳友であった野村朱鱗洞の墓参りをして、四国霊場を順打ちの愛媛、香川、徳島、高知と回っているとき、庵ができたという知らせに、山頭火は高知から飛んで帰ったという。

御幸寺の納屋を改装し、住めるようにした「一草庵」。畳の間は六畳と三畳であった。

「一草庵」を作るのに骨折った高橋一句に

おちついて死ぬそんな草萌ゆるの句を贈っている。

山頭火の喜びは尋常ではなかった。酒と温泉が好きで、徒歩二十分の道後温泉に通うことが山頭火の日課になった。

昭和十五年十月、柿の会の同人たちが六畳の間で句会。三畳で酒を飲み過ぎた山頭火がイビキを立てて寝込んでいた。寝込んだのではなく、脳溢血の発作で昏睡の状態であった。死去。享年五十八歳。

私は、居間の畳に座った。故郷を捨て、妻子と離別、自由律俳句という芸術に執念を燃やした男のすさまじい生涯が偲ばれた。

「一草庵」の濡れ縁に出た。ここからは南西の方向に、山頭火も見えたであろう松山城が見えた。

特別寄稿



『奥の細道』の旅 ―二千三百キロを歩いて―

小川 宏 一

(S.O. 3卒 電津市)

☆そぞろ神に心を狂わせて

高校生の時、国語の教師が『奥の細道』をリズムよく、情感をこめて語り詠じた。簡潔で歯切れの良い含蓄ある文章は、知的好奇心・探求心を強くかきたてるものであった。

五十歳代半ばころから「歩いてみたい」という思いが膨らみ、『奥の細道』の関係文献・書籍を集めて読み漁り、二万五千分の一の地形図や明治時代作成の迅速二万分の一地図等を買って求めて、『奥の細道』旅ルートを地形図に着色していった。

また、早稲田大学オープンカレッジで、『奥の細道』等の講座を受講し、芭蕉の俳諧に対する創造・革新の思いを学ぶことに努め、体力や読図力の向上のため、千葉県周縁を三十六日かけて歩いた。

二〇〇三年四月一日深川を出立、二〇〇五年十一月三十日大垣に到着し、私の『奥の細道』の旅は終わった。その間、妻の入院手術、父の入院・死亡もあり、諸行

無常の旅であった。

自宅と現地との往復日数四十日を含め百五十一日、歩行総距離は約二千三百キロであった。可能な限り江戸時代の道跡、または、その近辺を歩いた。廃道になった峠道などでは草木を掻き分けて、耕地整理された水田地帯では畦道を歩いた。出羽や越後の海岸道は、砂丘海岸も長く、断崖の続く荒磯も多かった。親不知海岸などでは、断崖の上の現在の道を歩くしかなく、口惜しい所もあったが。

☆「暑湿の労に神をなやまし」た

越後の旅

象潟から酒田に帰った芭蕉は、六月二十五日(陽暦八月十日)金沢に向けてまた旅立つ。

「酒田の余波日を重て、北陸道の雲に望。遙々のおもひ胸をいたましめて、加賀の府まで百三十里と聞。鼠の関をこゆれば、越後の地に歩行を改て、越中の国一ふり(市振)の関に到る。此間九日、暑湿の労に神をなやまし、病おこりて事をするさず。…荒海や佐渡に

よこたふ天河」と『奥の細道』に記す。

酒田から「荒海や…」の句が披露された直江津までおよそ三百三十キロ余りの行程であるが、具体的記述が何もない。なぜか?

酒田から村上までは、砂丘海岸、丘陵性山地を越える道、荒磯海岸の断崖付近を歩く道であり、村上(新潟)角田山(弥彦山の北)間約百十キロは、すべて砂丘海岸である。ただし、塩津(胎内市)―新潟間は、内陸水路の舟運を利用したと思われる。

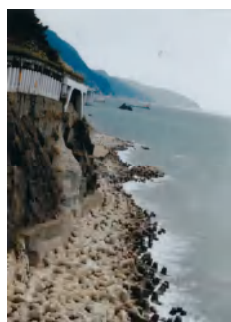
芭蕉の『幻住庵記』に「きさかたという処より越路におもむく。高砂ご歩みくるしき北海の、あら磯にきびすを破りて…」とあるように、酒田から越後の長途の旅は、真夏の炎天下、苦難の旅であった。かててくわえて、直江津、高田に至るまでに、俳席を持つ機会もなく、宿を断られるなど、心労は極に達していたと察するのである。

単調で変化の少ない光景の道を歩きながら、海上に浮かぶ佐渡島を眺め、島流しになった天皇や僧侶、金山で働く人々、これらの人々も旅人、苦難の道を余儀なくさ

れた旅人…。そんなことに思いを馳せて歩いてきたのであろう。折しも七夕の前に。

『銀河の序』に「あら海や…」の心情を芭蕉は語る。その『銀河の序』を『奥の細道』に掲げず、「無言」をもつて真情を伝えようとしたのである。「無言の言」である。語らず表現する世界を訪ねる者のみが知ればよいのである。旅に出よ!

そうして、子不知・親不知などの險路をわたり、峠を越え、人に会い別れ、多く知友の待つ結びの地、大垣に向けて、芭蕉は旅をまた続けるのであった。



親不知 付近の窓 付きトンネルは、歩道もなく、波な

らぬ大型トラックの轟音と疾風に、命縮む思いで歩き、俱利伽羅峠の「スズメバチ注意!」や東北地方の「熊出没注意!」の看板に、私は「生き物への危害者ではない」と念じながら歩いた。

「コスモスやゆーらゆらりと南無阿弥陀」

私の学園生活

稲毛・亥鼻・西千葉の思い出 ◆◆◆



伊藤 鉄夫

(S8・3卒
袖ヶ浦市)

「稲毛よいとこ一度はおいで、シエーンなメツチェン闇夜の星よ長いようでも短い二年：：」と、クラスコンパの時は、よく歌ったものである。

私の学園生活のスタートは、現在、小中台小学校がある稲毛キャンパスだった。戦争中の兵舎の跡の木造校舎である。

稲毛キャンパスは、文理学部と一般教養課程があり、そこで二年間学んだ。教師になりたいと入学したのに、教職に関係のない一般教養の講座に、落胆した記憶が残っている。

稲毛時代の思い出といえば、「六十年安保闘争」である。全学休講となり、クラス討論をしたり、国会前のデモに参加したりした。

印象に残っている先生は、「坊がつる讃歌」の作詞者で地学の神尾先生と国文学の大岩先生である。

三年次になると、教育学部の亥

鼻キャンパスで授業を受けるようになった。現在の県文化会館がある場所である。校舎は、師範学校時代からのもので、老朽化が著しく、この年(昭和三十七年三月)限りで取り壊すことになっていた。私は、亥鼻校舎を利用した最後の学生である。

校舎はおんぼろだったが、教育原理や教育心理、そして、教科教育法など、専門科目が学べる喜びでいっぱいだった。生涯の師となる国文学の岩澤文雄先生に出会い、宮澤賢治や新美南吉の作品を取り上げた「国文学演習」は、その後の私の人生に大きく影響した。教育実習でご指導をいただいた、ロールプレイングの時田光人先生との出会いも貴重なものだった。私は現在、千葉ロールプレイング研究会長を務めている。

四年次になって、教育学部は、西千葉キャンパスに統合された。岩澤先生のゼミ生になって文学教育にのめり込んだ。

「現代文学研究会」というサークルのリーダーになって、読書会や作文批評会などに熱心に取り組んだ。私にとって良き師、良き友に恵まれた素敵な学園生活だった。

佐々木充先生のもつて ◆◆◆



神野 雅博

(S4・3卒
東京都)

私は、卒論が書きたくてたまらず、千葉大学に入った。高校時代に「山月記」を読み、作品論として「中島敦の文学」という本に出会い、文章と内容に圧倒され、佐々木充先生のもとで、自らの課題である「三島由紀夫論」を書いたという思いを実現するために千葉大学を選んだのである。

しかし、入学した方がいいが、一年の時から佐々木先生のご指導を受けることは叶わず、この際だから徹底して勉強してやろうという思いで、教養の講義も演習も挑戦的に学んだ。大野先生の「文学セミナー」では、担当者の発表をもとに侃々諤々協議するのだが、文学部の学生と私とで論陣を張り、二人だけの論争の様相を呈してしまった。他の方々には申し訳ないという思いはあったが、今更自分を変えられないという思いでいっぱいだった。

高校までのやらされる勉強では

なく、自らやりたい勉強ができることがどれほど楽しいものかを堪能しながら大学生活を送っていた。

四年になって佐々木先生のもとで卒論に取り組んだが、夜遅くまで研究室で先生にご指導いただいた。厳しいご指導の例としては、「自分の考えを論理的に主張するのは大切だが、それだけでなく、十分人の論のよさも受け止めなさい」「北海道出身の渡辺淳一を読んでくれるのは嬉しいが、もっと漱石や鷗外をしつかり、丁寧に読むべきだよ」「同じことを考えたとしても、既に出版されていたのであれば、それは参考文献として書かなければならない」など、今でも心の中に、自らの戒めとして大切にしまっている。

ご指導いただいた後、何回か先生とご一緒させていただき、食事をしたこともある。また、昼間には、一号館の前で先生とキャッチボールをしたこともあった。とても楽しい時間だった。

十二月には、約三〇〇枚の卒論が提出できた。現在、校長を務めながら研究を続けられるのも、すべて大学時代に妥協なく学ばせていただいたお陰である。感謝！

鍼灸治療の理念から教育を知る ◆◆◆



篠崎 巖

(S.O. 3卒
千葉市)

学校現場に身を置いていたころ、偶然手にした東洋哲学の書に、「天人一如」という、慣れ親しんだような言葉があった。

目にした時は、さほど意に介さずにいたが、読み進むにしたがつて、その奥の深さを知らされ、愕然とさせられた。

ここにこそ、今まで求め続けていた教育の本質を知る手がかりがあると感じ、これを必ず学ぶと意を決していた。

幸い、東洋哲学の権威者が創設した鍼灸専門学校が手近な所にあることを知っていたので、定年退職後、早々に入学した。

鍼灸を学ぶためというより、東洋哲学を学ぶための入学だったが、東洋哲学と東洋医学が不即不離の関係にあること、人体と大自然との関係など、鍼灸理論を学びながら、さらに深く知ることができた。

東洋哲学の根底に流れる理論

は、万物の化成は、相反する性質を持つ陰と陽の二種の気の消長によるものであるとする考え方である。

さらに、それを「天・地・人」の気と組み合わせることで、自然の法則を解明し、人生をよりよく生きる術としての「易」という学問を生み出した。

それによると、人間を含めた地上の万物は、刻々変化する自然からの気の影響を受け、すべてが異なる先天性を持って生まれてくるという。この先天性の把握があつてこそ、後天性を無理なく伸張できるとしている。

人間はすべて同じという、先天性を無視した考えから始まっている現在の学校教育では、個の持つ能力を素直に伸張して行くには少々無理がある。なぜならば、個性の把握の仕方が、あまりにも狹隘であるがため、その範囲から逸脱する多くの児童生徒を生み出してしまふ。ここに、現代教育の行き詰まりがあるのではないかと考えている。

現在は、鍼灸院での治療を続けるかたわら、教育相談を通して、教育の思索を続けている。

平成二十四年度の事業計画を列挙し、支部だよりとしたい。

▼五月―事務局・四役会

・役員会開催案内発送(事務局)

・事務局年間役割分担等

▼六月―二十四年度役員会

(四役・事務局・幹事)

・二十三年度事業報告・会計報告

・会計決算報告・二十四年度事業計画・支部役員構成・支部会報

三十号(記念号)の発行等の提案

▼七月―会員名簿作成・会費納入

依頼文書発送(事務局)

▼八月―支部会報三十号編集会議

―校正会議(事務局)

▼九月―三十号発行・配布作業

・総会案内配布作業(事務局)

▼十月―事務局・四役会(支部総会運営等について)

―支部総会並びに懇親会開催

今年度の事業計画の中で、特筆すべきは会報三十号を記念号として編集・発行することである。

二十四年度の事業計画を列挙して思うに、支部活動の推進に欠かすことのできないのが、事務局の構成とその活躍にあると改めて考えた次第である。(木川 絢吉)

我孫子は、利根川を挟み、茨城県に隣接する自然と文化・史跡に包まれた東西に長い町である。

東日本大震災では、東部地区が液状化により被災した。以前から町が徐々にスモールサイズとなりつつあった上に、更に寂しくなった。一方、西部地区では、大型集合住宅の造成により、人口が急増し、学校の増築工事も行われた。

このように、人口急増地域と人口漸減地域を抱えた本市の教育は、学校や地域を俯瞰した包括的な見方が必要となる。

同窓会員は、OB・現役を問わず、このような市の状況を総合的に捉えて、高度な学校経営を推進してきた。例えば、かつて各学校が抱える困難な課題を解決した時、その中心になったのは同窓会の先輩校長だった。また、複雑極まりない教育の課題があろうとも、地域や保護者とともに、多面的に解決できる同窓会員も多かった。そろそろ、この英知を結集して、我孫子市の教育に寄与する活動を組織的に進める時期がきていると痛感している。(杉橋 朋子)

第60回定期総会開催される

第60回定期総会は、8月25日(土)に千葉大学教育学部大講義室で開催された。山中齊会長の挨拶のあと、瀧澤文雄教育学部長と志村修千葉市教育長から来賓挨拶をいただいた。その後、議長に佐々木紘三松戸市支部長を選出し、会務報告、決算、予算、教育学部創立140周年事業が原案どおり承認された。また、役員選出の審議もされ、次ページのとおり新会長・副会長・監事が満場一致で選出された。

その後、慶弔規程に基づき、功労者として伊藤鉄夫氏・斉藤靖之氏に、永年勤続者として出席された25名を代表して大森俊生氏に感謝状が授与された。

引き続き、滝口仲秋氏(S34年卒)による「逆境を生き抜く」という演題での記念講演があった。教職に就いて13年目に骨髄腫瘍という難病に侵され、4回の手術後車椅子生活となった。その後、失意のどん底から立ち上がり、障害とともに歩んだ半生、国内外を旅して経験したことや様々な出会いなどについて話され、会員に大きな感動を与えた。

記念講演終了後、会場を千葉大学生協第一食堂に移して懇親会が行われた。今年も100名を超す会員が参加し、千葉大学歌が斉唱されるなど、和気藹々の中で、旧交を温めた。（事務局長 宮島佑吉）

★平成24年度 功労者表彰

新田 夕力 本田 陽子 伊藤 鉄夫 白石 靖 齊藤 靖之

★平成24年度 永年勤続者表彰

[illegible]

幼稚園での生活だけでなく、長い時間を子供たちと共に過ごすことができたことに感謝です。そして、千葉大学を誇りに思います。

千葉大学教育学部附属幼稚園で三十三年間過ごし、今春、定年退職しました。

長い間在職していたので、幼稚園に行けば先生に会えると卒業生が寄ってくれたり、同窓会をしやすいかったりする状況がありました。

同窓会は、親子同伴、親のみ、子供たちのみと様々でしたが、いつまでも絆がながっているのを見るのは嬉しいものです。色々な近況を聞いていた時、二十五歳になった卒業生が「附属で十二年間過ごしたことで今の僕がある。附属はいい所だったと思う」と言いました。私は、母校を誇りに思うこと、そこで学んだことに応えようとする姿を見て嬉しくなりました、人を育てる実践が実を結んだように思いました。



駒坂孝子
(Sg・3卒
船橋市)

附属学校での生活に感謝

平成 4年度 経 常 費 予 算

収入の部

科 目	24年度予算	23年度予算	増 減	備 考
繰 越 金	957,913	1,042,516	△ 84,603	23年度繰越金
基本金預金利子	190,000	250,000	△ 60,000	基本金普通・定期預金利子
経常費預金利子	300	500	△ 200	経常費普通預金利子
寄 付 金	1,000	1,000	0	
雑 収 入	1,000	1,000	0	
基本金よりの受入	3,950,000	3,800,000	150,000	
計	5,100,213	5,095,016	5,197	

支出の部

科 目	24年度予算	23年度予算	増 減	備 考
1. 事 務 費	800,000	870,000	△ 70,000	
1) 消 耗 品 費	80,000	100,000	△ 20,000	文房具代、印刷代等
2) 通 信 費	110,000	120,000	△ 10,000	支部等への通信費
3) 事 務 局 経 費	510,000	500,000	10,000	事務局運営費
4) 雑 費	100,000	150,000	△ 50,000	メンテナンス料、備品
2. 会 議 費	990,000	990,000	0	
1) 総 会 費	450,000	500,000	△ 50,000	資料印刷費、懇親会補助
2) 理 事 会 費	150,000	150,000	0	旅費、会議費
3) 常任理事会費	100,000	100,000	0	旅費、会議費
4) 学内理事会費	10,000	20,000	△ 10,000	旅費、会議費
5) 役 員 会 費	110,000	100,000	10,000	旅費、会議費
6) 特別委員会費	130,000	40,000	90,000	旅費、会議費(監査他)
7) 専門委員会費	40,000	80,000	△ 40,000	旅費、会議費(広報他)
3. 事 業 費	3,090,000	2,990,000	100,000	
1) 会 報 発 行 費	860,000	700,000	160,000	印刷費、委員旅費等
2) 進 路 事 業 費	520,000	500,000	20,000	進路相談員経費
3) 記 念 品 費	1,100,000	1,150,000	△ 50,000	卒業、永年勤続記念品
4) 支 部 助 成 費	280,000	280,000	0	支部活動助成、旅費等
5) 慶 弔 費	160,000	160,000	0	退職教授饗別
6) 渉 外 費	170,000	200,000	△ 30,000	関係機関懇談会、行動費
4. 分 担 金	176,000	176,000	0	教育格、校友会分担金
5. 積 立 金	1,000	1,000	0	基本金への積立
6. 予 備 費	43,213	68,016	△ 24,803	
計	5,100,213	5,095,016	5,197	

平成 4年度 役員・理事・支部長

役 名	氏 名 (卒)	支部名	支部長氏名 (卒)
会 長	山中 齊(35)	千 葉 市	*斎藤 泰雄(33)
副 会 長	貫井 正納(40)	市 原 市	小宮 哲夫(36)
	町田 義昭(41)	習志野市	小池 脩一(43)
	上杉 賢士(47)	八千代市	上杉 修二(50)
監 事	高山みね子(37)	船 橋 市	木川 純吉(28)
	渡部 敏(40)	市 川 市	鈴木 實(31)
	阿部 美則(42)	松 戸 市	佐々木絃三(42)
理 事	*大塚 昌男(39)	柏 市	大森 俊生(49)
	*八木 雅之(44)	野 田 市	戸邊 一夫(44)
	*森 重文(45)	流 山 市	近藤 広(51)
	*佐藤洋一郎(46)	我孫子市	杉橋 朋子(51)
	鎗田 弘子(41)	鎌ヶ谷市	赤澤 春樹(47)
	本田 伶子(44)	印旛地方	中嶋 芳郎(22)
	藤田 俊明(45)	香取地方	菅澤 秀穂(40)
	岡村 太郎(47)	銚 子 市	石毛 弘二(42)
	湯日 千津(48)	旭 市	大関 正(28)
	藤井 俊夫	匝瑳地方	菅野 秀夫(29)
顧 問	岡田勝太郎(28)	山武地方	今関 弘(29)
	秋山 衛(33)	長生地方	*山田 一夫(37)
	國吉 丈夫(28)	夷隅地方	只野 和正(42)
事務局長	*宮島 佑吉(44)	安房地方	小磯 英明(52)
*印は常任理事		本更津市	*市東 宏(31)
		君 津 市	大野 文義(29)
支部名	支部長氏名 (卒)	富 津 市	岩埜 清史(36)
第4期生	不 在	袖ヶ浦市	伊藤 鉄夫(38)
第6期生	秋元 茂樹(33)	東 京 都	竹中 将隆(40)
第11期生	長野 靖(38)	第1期生	*黒川 弘(28)
第13期生	*川崎 正信(40)	第3期生	斎藤 實(30)

会報第117号
編集担当者

編集委員長 町田 義昭
編 集 長 大塚 昌男
編 集 委 員 本田 伶子
〃 安川 功
〃 角田 正明
〃 (臨時) 市野 昭子
事務局長 宮島 佑吉
写真提供 阿部 正勝
教育学部の
歩み構成 Wi CAN
学部のプロジェクトチーム

— 物故会員 謹んでご冥福をお祈り申し上げます ()内は卒業年 (H24.3~24.8) —

千葉市支部	八千代市支部	旭市支部	井本 健司(48)
島田 千代(18)	大野 景徳(22)	齋藤 武(33)	石原 文吉(23)
加藤 博仁(24)	長生地方支部	木更津市支部	東京都
山崎 絹子(30)	野口 祐嗣(28)	水野 章男(24)	荒井真理子(49)
笹本 武雄(10)	大村 優(18)	大川原三夫(15)	渡邊 廣子(49)
鈴木 純(17)	水嶋 茂樹(22)	銚子市支部	埼玉県
平川美代子(18)	香取地方支部	島田 良介(29)	鈴木久美子(47)
市原市支部	石橋 喜逸(13)	千葉県	北海道
佐久間利夫(19)	香取 長治(27)	鈴木 貢(30)	館 長 明佳(32)
佐久間 章(20)	香取 幸子(21)	玉井登三夫(30)	【お詫びと訂正】
秋葉 美枝(19)	安房地方支部	小高 房子(49)	前号の物故会員で
鈴木 秀明(31)	肥村 治夫(18)	高橋正八郎(23)	鈴木師範とあるの
習志野市支部	島田弥太郎(23)	内海 俊雄(27)	は、鈴木郁夫の誤
清宮 仁(24)	平島 雄二(24)	大沢 征仁(41)	りでした。

編☆集☆後☆記

「天は人の上に人を造らず、人の下に……」の冒頭部で有名な「学問のすすめ」(福沢諭吉が上梓されたのは、今から百四十年前の明治五年(一八七二年)である。明治維新の新風のもと、日本最初の近代的学校制度を定めた学制は、この年に公布された。▼教育学部の源流を遡ると、明治五年の印旛官立学舎に辿り着く。近代日本の幕開けに産声をあげた教育学部は、一世紀半に及ばんとする幾星霜を重ね、今や同窓生四万人を超す。教育界をはじめ各界に有意な人材を輩出している。▼「教育は国家百年の大計」と言われるが、それを遙かに凌ぐ百四十年の長期にわたる業績は誇るべきものである。いつの時代にあっても『師道』の理念は、脈々と継承されて揺るぎない。▼今回の会報は、『記念特別号』として、関係各位の挨拶、沿革、記録写真等、カラー刷りの増ページとした。本学部で学んだ同窓生の回顧のよすがとなり得たであろうか。▼今後も紙面の一層の充実を心掛け、末永く愛読される会報となるよう編集委員一同労を厭わない心積もりである。

(安川 功)